

表9 問題解決の成績 (% ile)

| 等質 集 団   |      |      |      | 異 質 集 団  |      |      |      |
|----------|------|------|------|----------|------|------|------|
| Gr. I. D | 第1期  | 第2期  | 第3期  | Gr. I. D | 第1期  | 第2期  | 第3期  |
| g05      | 96.9 | 34.4 | 90.6 | g21      | 34.4 | 65.6 | 96.9 |
| g06      | 34.4 | 59.4 | 96.9 | g22      | 9.4  | 96.9 | 96.9 |
| g07      | 21.9 | 96.9 | 34.4 | g23      | 3.1  | 78.1 | 53.1 |
| g08      | 96.9 | 34.4 | 21.9 | g24      | 34.4 | 53.1 | 96.9 |
| g13      | 53.1 | 78.1 | 96.9 | g29      | 96.9 | 84.4 | 21.9 |
| g14      | 9.4  | 96.9 | 40.6 | g30      | 28.1 | 9.4  | 46.9 |
| g15      | 96.9 | 59.4 | 40.6 | g31      | 96.9 | 65.6 | 96.9 |
| g16      | 96.9 | 78.1 | 96.9 | g32      | 34.4 | 21.9 | 78.1 |
| 中央値      | 75.0 | 68.8 | 65.6 |          | 34.4 | 65.6 | 87.5 |

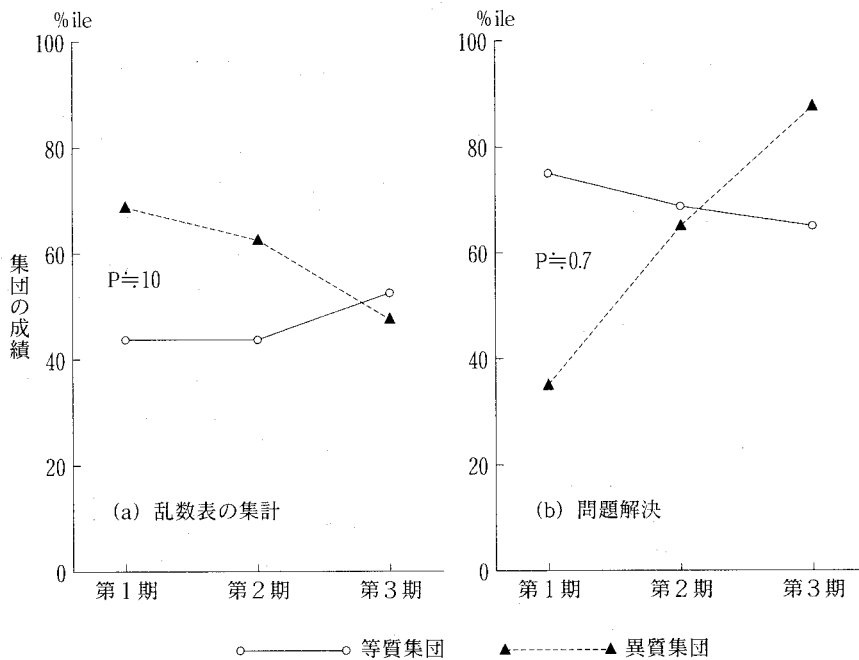


図4 二種の課題における集団成績の推移：等質集団と異質集団の比較

鯨、白樫 (1978) における等質集団の定義の問題など詳細に検討すべき問題が残されている。これについては後に総合的考察の項で検討を加えるであろう。

2. 質問紙調査の結果

調査に用いられた質問項目は、白樫 (1978) が「集団討議に関する質問項目」として用いた12問 (いずれも5段階尺度) と、同じく「集団雰囲気評定尺度」と呼んだ8対の形容詞から成るセマン

ティック・ディファレンシャル形式の質問項目 (すべて5段階尺度) であった。

はじめの12項目は白樫にならって、因子分析にかけバリマックス回転して表10を得た。得られた因子構造は白樫のものとはかなり異なっている。課題の種類、1集団の成員数、等質・異質集団の定義などに相違点があることから考えて、ある程度予想されたことである。そのことに関する議論は後の項に譲るとして、われわれは表10の結果か